



IP SJ Magazine

[巻頭コラム]

市民参加型コミュニティ

■ 塚田 浩二

昨年イグノーベル賞を受賞した「SpeechJammer」は、大手国際会議にリジェクトされ続けた研究を Web で公開した途端、インターネットを中心としたメディアで爆発的な支持を得て、受賞につながるという数奇な道程を辿りました。既存の権威（＝学会）で否定された研究が、草の根的な圧倒的な広がりで見聞中の人々の琴線に触れるさまを目にすると、研究発表の在り方を考えさせられました。応用系の情報科学研究の大きな目的の 1 つは、情報技術を駆使した新しい発想／メッセージを社会に発信することであり、学会に限らない多様な社会展開を考慮するべきではないか、と改めて感じました。

そうした新しい社会展開の場として、近年学会のような専門家コミュニティとは異なる、市民参加型コミュニティが急速に立ち上がってきています。

Maker Faire は、米国オライリー社（現・Maker Media 社）の雑誌「Make」を母体として 2006 年に始まった DIY の祭典であり、大学／企業／趣味人等の多様な立場の展示者が、電子工作／日曜大工／手芸といった多様な分野の展示を行っています。現在は世界中で年間 50 カ所以上、日本でも 2008 年から毎年開催され、昨年は出展者 250 組、参加者 9,000 人を集めています。

ニコニコ学会βは、ニコニコ動画上で活躍する「(研究を本業としないが腕の立つ) 野生の研究者」を発掘することを目指したコミュニティであり、プロの研究者と野生の研究者がオフラインで集まり、ニコニコ生放送を通してインターネット中継するスタイルで活動を行っ

Make:



■ 塚田 浩二

公立はこだて未来大学准教授，科学技術振興機構 さきがけ研究者（兼任）

1977年生。2005年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程修了。博士（政策・メディア）。産業技術総合研究所研究員，お茶の水女子大学特任助教，科学技術振興機構さきがけ研究者を経て，2013年4月より現職。生活環境での利用に適したユーザ・インタフェースの研究・開発に従事。2012年イグノーベル賞（音響学）受賞。



ています。2011年12月から半年ごとに4回開催されており，各回5～10万程度のオンライン視聴者を集めています。

Quantified Selfは，2011年に米国シリコンバレーを中心に始まった，ライフログ／ヘルスケア分野を中心に，ツールの開発者／研究者とそのユーザが集まるコミュニティです。入手の容易なライフログツールを利用することで，一般ユーザでも定量化したデータに基づく科学的な議論がしやすい点が特徴です。日本でも2012年5月から始まり，約3カ月ごとに過去4回開催されています。参加者は各回30～60人程度で小規模ですが，外国人参加者も多い独特のコミュニティを形成しつつあります。

これらのコミュニティは発表スタイルやトピック等は異なりますが，研究者／開発者／ユーザといった枠を超えて同じ場で熱のある発表／議論が行われ，ブログ／ビデオなどWebを介した情報共有が積極的に活用されている点が共通しています。企業から「個人」として参加する人々も多く，新しい情報交流／活動の場となりつつあるように感じます。たとえば，技術力のあるエンジニアが（本業とは異なる）好きなものを作って発表する，「素人発想・玄人実行」の実践の場になり得るのではないかと思います。

研究者にとっても，こうした市民参加型コミュニティが，研究と社会をつなぐ新しい場として機能していくのではないかと思います。情熱だけで研究に取り組んだあの頃の熱気を感じに，気軽に参加されてみてはいかがでしょうか？

